

和蘭カルタ

野村胡堂

—

「親分、子さらいが流は行やるんだってネ」

「聞いたよ、憎にくいじゃないか」

銭形平次は苦い顔をしました。

「赤ん坊あかならどこへ連れて行かれても、それっきり判らなくなるかも知れないが、浚さらわれるのは大概七つ八つから十二三の子だからどんな場所に売られたにしても、土地の役人なり御用聞なりに、名乗って出られそうなものじゃありませんか。江戸だけでも何人あるか知れないが、一人も行方が判らないとは変だねえ、親分」

ガラツ八の八五郎も、時々はこういった上等の知恵を出すこともあったので
す。

「だから俺は考えているのさ、相手の見当だけでも付かなきゃア、うっかり手
は出せねえ、——だがな八、金や品物を盗られたのなら、働いて取返す術すべもあ
るだろうが、子供を浚われた親の身になって見れば、諦めあきらようがあるまい。悪
事の数も多いが、信夫しのぶの藤太の昔から、人の子を取るほど罪の深いものはない
なア」

銭形平次も妙に感傷的でした。

「女の子だけを浚うなら解っているが、時々男の子を誘拐かどわかす了簡が解らない
じゃありませんか」

八五郎はまだ首を捻ひねっております。

丁度その時、

「御免下さい、錢形の親分さんはこちらで——」

門口から年配の女の声、平次の女房お静は取次ぎに出た様子です。

「八、また誘拐かどわかしらしいぜ」

「どうしてそんな事が判るんで、親分」

「女が二人連れで、こんなに早く御用聞の家へ来るのはよくよくの用事さ」

「へッ、当るも八卦けという奴で」

八五郎はガチャガチャをやる真似をしました。

「金座の勘定役石井平四郎様の御召使が二人でお出でになりました」

お静が取次ぐのを待っていたように、

「到頭俺の縄張内なわばりうちへやって来たのか、よしよしこの辺が乗出しの潮時だろう、

丁寧に通すんだよ」

「ハイ」

引返したお静、間もなく二人の女を案内して来ました。

「始めてお目にかかります。私は金座の役人石井平四郎の雇人、やといにん霜と申します。御坊ちやまの乳母をいたしておりました、これはお附きの小間使い春で御座います」

挨拶をしたのは、四十二三の如何にも実直そうな女、その後ろに小さく控えしたのは、十七八の大商人の召使いらしい美しい美しい娘です。

「平次は私で、——どんな御用でしょう」

「大変な事が起りました」

「坊っちゃんが誘拐かどわかされたんでしょう」

「えッ、ど、どうしてそれを」

「お前さんの顔に書いてある」

「えッ」

お霜の驚きはおおげさ大袈裟でした。

「まア、そんな事はどうでもいい、——坊ちゃんの見えなくなった、前後の事を詳しく聴くわこうじゃありませんか」

平次の調子には、いろいろの意味が籠こもっていていそうです。

「こうなんですよ、親分さん、——昨夜戌刻いっつ少し過ぎでした。あんまり暑いんです、お春さんが坊ちゃんを表の縁台で遊ばせていると、昼買った花火がたんす箆筒の上にあった筈だから、持って来いと仰しやるんだそうです。店には多勢人が居るし、まだ往来もある頃だから、何の気なしにお家へ入って、花火を捜して持つて出ると、ツイ今しがたまで遊んでいた、坊ちゃんの姿が見えないんです」

「手間は取らなかつたらうな、お春さん」

平次は乳母の饒舌じょうぜつを少し持て余したように、側で黙って俯向いているお春を顧みました。

「いえ、ほんの煙草なら三服吸う間でした」

お春は、多い毛を重そうに、こう顔をふり仰ぎました。

申分なく美しい縹緖ですが、何となく弱々しいうちに、肉体とは没交渉ほつこうしように強い魂を持っていそうな娘です。

「そんな一寸の間に、どこへもいらつしやる筈は御座いません。それから大騒動をして、町中を捜しましたが、どこにも見当らず、奉公人や、御近所の衆や、お出入りの人達が八方に手をわけて、一と晩寝ずに捜しても悉かいくれ皆行方が解らないんです」

「——」

「もしや、神隠しにでも逢ったんじゃないかという方もありますが、神隠しなら三年五年経って出て来ることもあります。——あの、この節江戸中の騒ぎになっている、子こさらいの手に掛つたら、どうしましょう」

お霜は大きく眼を開いて、ゴクリと固唾かたずを呑みました。忠義者には相違ないまでも、お春に比べると、何となく神経の鈍にぶそうな女です。

「大事なことを訊かなかったが、坊ちゃんは幾つで、名は何と言いなさるんだ」

「七つで御座いますよ。勇太郎様と仰しゃって、それはそれはお可愛らしいお子さんで御座いますよ」

お霜は自分の子の事でも言うように誇ほこらし気でした。少し動物的かも知れませんが、とにかく、自分の育てた子を、この上もなく可愛がっていることは確かです。

「お霜さんは江戸に家があるんだろうね」

「へエ、大根畑だいこんばたけ（本郷新花町）に世帯を持っていますでしたが、亭主の文七がやぐざで三年前に別れてしまいました」

「お春さんは？」

「木更津きさらづで御座います」

「とにかく、やって見るとしよう。子こさららいも、長崎ながさきや堺さかいや、大坂おおさかから流行はやりつて来たことで、江戸では品川しんがわ寄と深川ふかがわにあったただだが、俺の縄張なわぢやううちへ来ちや放はなつて置けまい。八、一緒に本町ほんまちまで行いつて見るか」

「へエ——」

平次とガラツ八は、お霜、お春の二人に案内さかされて、本町の石井平四郎の家まで行きました。金座きんざの勘定役かんじやうやくというと、今の日本銀行の重役じゆうやくで、その住居すまひ、調度、奉公人の数など、目を驚かすばかりの豪勢ごうせいさです。

二

「銭形の親分、——飛んだ骨を折らせるが、搜さがし出せるものなら、何なにとかして

無事な顔が見たい。子供は多勢あるが、あれは総領で、生れて直ぐ母親に死別
 されただけに不愾ふびんも一と入しおだ、——金づくで済むことなら、——」

石井平四郎はそういった男でした。金座の御金改役後藤庄三郎の片腕と言わ
 れた利け者で、元は吹屋町で手前吹てまえふきをしておりましたが、後、後藤庄三郎の配
 下になって、その辣腕らっわんを勘定奉行に認められていたのです。

「御存じの通り、日本の津々浦々で大騒ぎをしている子こさらいの仕業でしたら、
 容易にお請け合いは出来ませんが、平次の縄張へ来た以上は、何とか眼鼻だけ
 は附ける積りです」

伴の命を助けるのまで、金づくで済ませようといった、成金根性が癩しやくにさわつ
 たものか、銭形平次は日頃に似気ない奥歯に物の挟はさまった物の言いようをしま
 す。

「宜しく頼みますよ、銭形の」

平四郎はさすがに打ち萎しおれて居りますが、仕事が繁多なので、そのまま役所の方へ出かけてしまいました。

新造のお君は二十七八の美いい女で、男女二人の母親とも見えぬ若さです。

「銭形の親分さん、お願いです。勇太郎は生なさぬ仲で、そうでなくてさえ、私は世間から白い眼で見られます。どんな事でもしますから、無事に救い出して下さい」

一生懸命に、平次の袖にも縋すがりかねない勢いです。

「何分あの人さらいに逢つて、無事に帰ったのは一人もありません。出来るだけの事はやって見ますが——」

平次の自信のなさ。お君はおろおろしておりますが、銭形が見放すほどの事件をどこへも持って行きようはありません。

ともかく、奉公人に一応引合わせられ、お霜とお春の案内で家の裏表を見廻

りましたが、余程企たくらんだ仕事と見えて、手掛り一つ残ってはいません。

「お前さんはその時どこにいなすったんだ」

平次は責任者のお霜に問いかけました。

「坊ちゃんのお寝みの仕度をしておりました。お春さんの声を聞いて、御新造様と一緒にびっくりして飛出したようなわけで——」

「その時、外の縁台には誰もいなかったんだね」

「誰か見ていたら間違いはなかったんでしようが、折悪しく誰もいなかったそうです」

これでは手の付けようがありません。外の奉公人や、近所の人にも当たって見ましたが、お春が花火を取りに家へ入ったのは知っています。勇太郎の誘拐かどわかされた姿は誰も見た者はなかったのです。

勇太郎のよく知っている者が、遠くから誘いをかけて呼寄せたか、でなければ

ば、煙のような姿のない曲者が、声も立てさせず、反抗もさせずにそつとさらつて行つたと見る外はありません。

「まるで神隠しだ」
かみかく

ガラツ八の八五郎も酔っぱい顔をして見せました。

「八、ここではこの上の手掛りはない。笹野の旦那にお願いして、縄張外だが、他の方を当つて見よう」

平次はそこから直ぐ数寄屋橋の南町奉行所へ廻り、子さらいの記録を一応見せて貰いました。それによると江戸では昨今ですが、長崎や堺や大阪は随分前からあつた事らしく、曲者がどうしても挙らないばかりでなく、誘拐された少女が、それっきり死骸さえも現われないので、長崎奉行その他から、曲者の手口から、一切の始末書が、かなり詳しく公儀へ来ております。

平次は笹野新三郎に会つて、その了解を得た上、その足で直ぐ芝浦から品川

へ廻りました。最初に子供をさらわれたのは、車町の酒屋で、お村という九つ
の娘、子柄の良いので評判だったのだが、去年の秋のある日、浜へ行つて遊ん
でいて行方不明になりました。その時は、大分争つたものと見えて、その辺中
散々荒した上、痛々しく血までこぼれていたと近所の者が多勢言つております。
次は田町の鑄掛屋いかけやの倅藤吉、これは十二になつて、逞たくましい子でしたが、夕方
使いに出た帰り、近道をして浜で曲者に襲おそわれ、持物も着物も滅茶滅茶に千切つ
て捨てて、それつきり姿を見せません。

三番目は芝口の御家人ごけにんの子、四番目は飛んで深川大島町の大工の娘、五番目
は熊井町の船頭の倅、六番目は――。

平次もガラツ八もこの曲者のやり口の残酷ざんこくさに、腹の底から義憤のようなも
のがコミ上げました。さらわれたのは、美しい女の子か、丈夫そうな男の子で、
武家も町人も見境みさかいはありませんが、一致した点は、いずれも嫌がるのを力づく

で、無理に連れて行つた形跡のあることです。金座の石井平四郎の倅のように、何の抵抗もなく、騙だまされて、連れ出されたのは一人もありません。

もう一つ変っているのは、あとの六人は町内の評判になるほどの綺麗な娘か、賢くて身体の逞しい男の子に限られておりますが、金座の石井の倅勇太郎だけは、乳母うばのお霜は可愛い子のように言いますが、外の奉公人や近所の人は、容貌きりようも悪く、身体も弱く、心持まで少し発育が遅れて、七つといつても、精々五つ位にしか見えなかつたと言っております。

三

銭形平次一代のうちに、この時ほど大手柄を立てた事はありませんが、平次自身に言わせると、この時ほどの失策はなかつたと言います。

とにかく、石井平四郎の倅と、他の六人の子供の行方不明の関係には、何かしら、重大な不一致点がありました。今更そんな事を詮索せんさくしてもおられませんが、ガラッ八を督励して、品川から深川一円をあさっていると、誘拐かどわかされた子供は、悉く暴力で連れて行かれた事の外に、日中も、夕方も、時刻かまわず人をさらっているくせに、場所だけは例外なしに、海か河か、とにかく水に近いところでやっている——という特色を掴つかむことが出来ました。

「泣きわめく子供を連れて、町の中を逃げるわけにはいくまい。やはり、船かな」

平次の最初の手掛りはこれでした。

それにしても、さらわれた子が、一人残らず、かき消すように見えなくなるのは容易なことではありません。江戸の子を長崎へ連れて行っても、大阪の子を江戸へ連れて来ても、言葉遣いだけでも直ぐ身許ろけんが露顕しなければならぬ筈

です。

「切支丹きりしたんがさらって行って、生胆いきごみを取るんじやありませんか——世間ではそう
言っておりますよ」

「馬鹿な」

ガラツ八の疑いを一笑に附しましたが、物を理詰めに考える事の出来ない人
達は、生胆伝説と結び付けて考えるのも無理のないことでした。

「近頃の流行物はやりものというは何だろろうな、八」

平次は妙な事を訊きます。

「解っているじやありませんか、堺町の中村座に、吉原の繁昌——」

「そんなものじゃない」

「豆蔵の人寄せに言う——うんすんカルタしゅすに縷子の帯、ビードロ細工しゅすに人さら
い——などはどんなもので」



「それだよ、八」

「へエ——」

「うんすんカルタじゃいけない、和蘭オランダカルタがあつたら、一と組欲しいな。御ご禁制品きんせいひんだから容易には手に入るまいが、これだけ持って行つて、江戸中の舟着場をあさつて見てくれ」

平次はお静を呼んで財布を出させると、中から小粒を一つ掴み、二三両もあろうと思うほどのへ、小判を二枚添えて、ガラツ八に渡しました。

「これだけありや、人参でも沈香しんこうでも買えるぜ親分」

「その人参や沈香の方も気をつけてくれ、近頃は唐、天竺てんじく、和蘭オランダあたりの品がよく入るようだから、——拔りはあるまいが、どこからそんな品が手に入つて来るか、突き止めるんだよ。もつとも抜け荷や禁制品を扱う者は口が堅いから、うっかり用心させると、田螺たにしみたいになるぜ」

「心得たよ、親分」

「言うまでもないが、抜け荷や和蘭渡りの禁制品を扱う問屋を嗅ぎ出すのが第一だよ。金に糸目は付けねえ、それで足りなきやア、八所やところ借りをしても苦面してやる。沈香や人參は手におえないが、和蘭カルタとギヤマンの品のいいのがあつたら逃がすな」

「へエ——、少し位なら、あつしも持っていますよ」

「大層な心掛けだな」

「男が敷居を跨またげば、八人の敵——つて言うじゃありませんか」

「七人——の間違いだろう」

「一人位は多くたって驚きやしません」

「いくら持っているんだ」

「小粒が一つ、四文銭が三枚」

「馬鹿だな」

「へッへッへッ」

ガラツ八は面白そうに笑って出て行きました。屈託くつたくを知らない男の気楽そうな後姿が、ともすれば神経質になる平次を、どんなに力づけてくれるかわかりません。

四

それから三日、石井平四郎夫妻はせつせとお春やお霜を使いによこして、その後の様子を訊ねますが、平次の方からは何の報告しやうどくもありません。

なまじ金座などをうろついで、世間の耳目を聳動しやうどうさせるより、外の方で動きの取れぬ証拠を集め、一挙にして曲者を縛ろうというのでしよう。

石井の家では、主人の平四郎よりも継母のお君の方が気を揉んでいとお春は言いますが、平次に言わせると、それよりも、勇太郎しっそう失踪の直接の責任者と思われているお春の方が気を揉み、お春よりは又、七年間勇太郎を育てたお霜の方が大きな打撃だげきを受けている様子です。

「坊ちやまが無事で救い出されなければ、私は生きてはおられません」

と勝気らしいお春が泣くのを、平次はどれ程持て余したことでしよう。お霜の方はあまり愚痴ぐちを言いませんでしたが、段々痩せて憂鬱うゑんになって行くのは、心の悩みが一段と深いせいでしょう。

そのうち人さ、ら、いが又活躍を始めました。春から二た月ばかり休んでいました、石井平四郎の伴を皮切りに、段々大川筋を溯上さかのぼって、本所、浅草あたりまで荒らすようになったのです。

「親分、到頭手に入れましたぜ」

ガラツ八が飛んで来たのは、それから又二日も経ってからでした。

「和蘭カルタか」
オランダ

「それがいけねえ、うんすんカルタならどこにもあるが、和蘭カルタとなると滅多にありません」

うんすんカルタは和蘭カルタ（トランプ）の禁制後それを模造した和製品で、平次には意味がありません。

「――」

「薬種屋か、唐物屋で訊くのが一番だと思って、沈香じんこうか古渡りのギヤマンでも買うような顔をして、日本橋の間屋筋を一軒残らず歩きましたよ」

「それは御苦労だった」

「あつしはお上の御用を勤める人間とは見えないでしょう」

「そうともそうとも、そんな目出たい顔をした御用聞がいようとは、どんな人

だつて気がつくめえ」

「から、かつちやいけません」

「ところでどうした」

オランダもの

「長崎町の大野屋に和蘭物がいろいろありましたよ。金銀細工物、羅紗らしゃ、ビードロ、それから見たこともねえ飾りや織物——、いつそ皆な買い占めるような顔をして、手付が五両」

「呆れた野郎だ、手付を置いただけで身上が皆なになつたろう」

「和蘭カルタの事を切出すと、心当りがあるから、明日になつたらもう一度来て貰いたい、今晚中には手に入れて置く、もつとも禁制品だから、五両より安くはむずかしいという話で、それは構わないが、明日又大野屋へ行くとなると、五両の手付けを置いた品を皆な引取らなきやなりません、金高にして、ざつと七八十両がものはありますぜ」

「心配するな、どうせ半分は抜け荷だ、俺が行っていいようにしてやる。ところで今晚は命がけの仕事をするんだが、付き合ってくれるかい、八」
「ヘッ、付き合ってくれるかい——は水臭いね、親分の前だが、はほか憚りながら命には糸目をつけねえ」

「豪儀だね、もつとも、金には糸目をつけたくも、御同様百も持っちゃいめえ」

「ちげえねえ」

気が揃った二人、それから仕度をして、薄暗くなる頃から長崎町川口町一帯を張りました。

「親分、何にも来ませんね、もう亥刻よつ過ぎましたぜ」

蒸暑い晩でした。八五郎はすっかり茹うだって、愚痴を言い始めます。

「静かにしろ、あッ、煙草入れなどを出しちゃならねえ」

「驚いたね、どうも」

「手前は銀町しろがねちようの方を見ているんだ、俺は東湊町ひがしみなとまちの方を見張ろう、松平越前守様御屋敷などはどうでもいい」

五

「あッ、船」

「シッ、その船が怪しい」

二人は物蔭に隠れました。しろがねちよう銀町二丁目、三の橋の橋詰に着けた小舟が一艘、中から二人の人間が無提灯で大きな荷物を背負ったまま、長崎町一丁目の方へ入って行ったのです。

「捕まえましようか、親分」。

「逃がしちゃ大変だ、——それ、大野屋の裏へ入ったろう。今に出て来るに決っ

ているから、船の中に隠れていよう」

「そんな事をして構いませんか」

「構わねえとも、どうせ抜け荷を積んだ船だ」

二人は曲者くせものの出た小船の中へ、音もなく潜り込みました。

「隠れる工夫はないか、八」

「こんな小さい船じゃどうすることも出来ませんや」

「弱ったなア、抜け荷ぬけにを扱う人間は口が固いから、ここで荒立てると、親船が判らなくなる。大川から芝浦、洲崎へかけて、あんなに沢山船が居るから、どれが抜け荷を扱う親船だか見当のつけようはねえ」

「弱ったなア、——この葛籠つづらの中はどんなもんで」

「お前入ってみるか」

「親分は？」

「菰こもの中へ隠れよう、水垢みずあかで少しジメジメするが」

平次とガラツ八がどうやらこうやら身を隠した時、曲者二人は帰って来ました。

「悪くねえ商売だな吉、和蘭オランダカルタが二両だ、——こいつは親分には内証ないしよだぜ」

「いいとも、その代り一両は口止めによこせ」

「まア仕方がねえ。ところで、この辺で江戸も切上げだろうな」

「こんな仕事の深入りはよくねえよ」

曲者二人、静かに小舟を漕こいで行きます。

それから半刻あまり。

小舟は越中島を廻って、洲崎六万坪の沖あたりまで来ました。

「親船は見えるかえ」

「灯がないから見当はつかねえが、この辺から遠くはねえと思うよ」

「月が出たら判るだろう、ゆっくり漕げ」

「お、そこにいるぜ、声を掛けて見ようか」

「どっこい、うっかり声を出して、見張りの船にとがめられるとうるさいぜ」

曲者の話を聞いて、平次は菰こもの中から顔を挙げました。一二町先に、陸地近く泊っているのは、灯も何にもない、二三百石積の船です。

ここまで見定めて置けば、もう大丈夫です。

「――」

御用とも何とも言わず、ツイ鼻の先で權かゝいを握っている男の脇腹わきばらを、思い切り一つ突きました。

「ウーム」

一ぺんに目を廻した様子。

「あッ、手前は何だ」

櫓を押していた方の男が起ち直りました。

「静かにしろ」

飛付いた平次。

「あッ、た、大変ッ」

何分狭い舟の中、口を封じる隙もなく、親船へ援けを求められます。

「親分、打とうか、縛ろうか、それとも水へ投り込もうか」

ガラッ八は漸く葛籠をハネ開けて、曲者の後ろから無手と組付きます。

騒ぎは一瞬でおわりました。

二人の曲者を縛って、一応八丁堀へ引返し、改めて笹野新三郎が出役、十数艘の小舟で怪しの船を囲み、命がけの働きで、乗組の船頭八人を生捕ったのは、もう真夜中過ぎ、鉄砲を撃たれて、大分怪我人も拵えましたが、ともかく、大成功で御船手屋敷まで引いて来たのは暁方近くでした。

調べて見ると、これが、今の南支那、台湾から日本の沿海を荒し廻った、抜け荷（密輸入）扱いの一味で、和蘭人オランダじんや葡萄牙人ポルトガルじんから、雑貨薬種を仕入れては日本へ持帰り、それを金に代えるかたわら、船着き場で少年少女を誘拐かどわかし、それを支那から、南洋へ連れて行つては、良い値で売り飛ばしていたのです。

内地で人身売買をしない為に、容易ろけんに露顕ろけんしなかつたのですが、抜け荷と關係があると睨ねんんだ、平次の慧眼けいがんに見やぶられ、到頭一味ことごと十人悉く生捕せいとられ、直ぐさま手配をされて、大阪、長崎にいる仲間まで一掃そうされてしまいました。それは後の話——。

誘拐かどわかされた少年少女のうち、今年の春からの分だけ、約半分は船の中で見付かえけ、それは銘々の親許かえに還かえしましたが、不思議なことに、金座役人、石井平四郎の伴勇太郎だけはその中に見えませぬ。

十人の曲者は、散々責め問われましたが、本町や吹屋町は、船からの足場が

悪いから、人さらいに行つた覚えはないと言ひ張るのです。

命はどうせないものと覚悟した悪者共の言うことですから、この言葉に嘘があろうとも思われません。

抜け荷さばきと人さらいの、江戸開府以来という悪者の団体は挙げましたが、たった一人の勇太郎を救うことが出来なかつたのは、銭形平次何としても我慢がなりません。

「八、弱つたなア、石井の伴は一体どうした事だろう」

「親分、諦めた方が無事ですぜ、あれだけ捜して見付からないんだから、いよいよ神隠しとでも思わなきやア」

大手柄に陶醉して、八五郎はこんな事を言いますが、仕事に神経質な平次はどうしても諦らめきれません。

「親分、大変なことになりましたぜ」

「何だ八、——近頃大変な事続きで、滅多な事じゃ驚かないが——」

平次は苦笑いしました。何となく気の滅入るめい四五日だったので。

銭形平次の手柄は、いやが上にも評判になって、うっかり外へ出ても、人に顔を見られるようなこの頃ですが、平次にとっては、それがまた、たまらない屈辱くつじよくのような気がしてならなかったのです。

頼まれもしない十何人の少年少女は救いましたが、あんなに頼まれた、たった一人の少年を救うことが出来ないのは、何という意地の悪い廻り合せでしょう。

「冗談じゃねえ、親分、お春が死にましたぜ」

「お春？」

「金座役人の石井のお小間使さ、——坊ちゃんがさらわれたのは私のせいだし、他の子が助けられた中に、坊ちゃん一人だけ見付からないようでは、申訳けがなくて生きちやいられないという遺書かきおきがあつたんですって」

「それは気の毒だ、勝気な娘のようだったから無理もないが、そう言われると、何だか俺が殺したような気がしてならねえ」

「親分、冗談じゃありませんよ」

「とにかく、石井へ行って見ようか」

二人はそのまま本町の石井平四郎の家へ行きました。十日目位の訪問です。

死んだお春は人気者だったので、家中が何となく湿しめっております。死装束しにしょうぞくの晴着に換えて、白布で膝ゆわを結え、香まで焚いて、どこから持出したか、女持の懐剣、左乳の下を一とえぐり、武士も及ばぬ見事な最期だったので。

「あ、早まつてくれた」

平次はその前に坐つて暫らく黙禱もくとうを続けました。勝利の後のほろ苦い悲哀と
いったようなもの、——名匠めいしやうが不本意な仕事を俗衆にヤンヤと言われる時のよ
うな、——言いようもない腹立たしさと交つて、若く美しい娘の死を悼いたむ氣持
が、異様に胸を騒がせるのでした。

「親分さん、ちよいと」

新造のお君が平次を呼びます。

「飛んだ事で、御新造——」

「お春は可哀想ですが、このままにしておく、乳母のお霜も生きていないか
も分りません。お霜に万一の事があると、勇太郎の継母はの私も——」

お君は日頃から慎み深い、冷たい女ですが、さすがに夫や世間の思惑おもわくにさい
なまれて、万一の場合には死んでしまい兼ねまじき顔色です。

「そんな事をなすっちゃいけません、坊ちゃんが生きてさえいるものなら、どんな事をしてでも捜して上げますよ」

平次もこう言うのが精一杯でした。

「生きている事は確かです御座います」

「と言うと？」

「昨夜、坊やの着ていた着物の襟を剥して、こんな手紙と一緒に店へ投げ込んで行つた者があります」

お君が取出したのは、鼻紙一枚へ、灰を溶いたような粗悪な墨で書いた、仮名書の手紙でした。恐ろしい悪筆で、容易には読めませんが、大骨折で弁慶読にすると、

「坊っちゃんは無事だ、この上とも殺させなくなかったら、十両よこせ。」

金は裏口の右土台下の穴へ入れて置くがよい、その上で折を見て子供は返す。

誰にも言うな、言うとい子供の命はないぞ」

とこんな意味の事が書いてあるのです。

「金はどうしました」

「昨夜土台下へ入れて置きましたが、今朝見ると、なくなっています」

「誰かに見張らせたんでしょうね」

「いえ、そんな事をする、坊やの命が危ないと思って、——それにたった十両ですから」

「成程、心配は御もつともだが、惜しい事をしたものだ、——いや、たった十両欲しいと言ったのが面白いな、どうかすると、もう一度百両とか二百両とか吹掛^{ふっか}けて来ますよ」

「そうでしょうか」

「その時は御新造」

平次は何やらお君の耳に囁いて帰りました。

七

翌る日、銭形平次がガラッ八の前に硯箱すずりばこを持って来させました。

「八、ちよいと字を書いて見る気はないか」

「からかつちやいけません。親分、字を書かされるような悪事をした覚えはありませんよ」

八五郎はすっかりお冠かんむりを曲げます。

「まア、そう言うな、手紙一本書くだけだ。ちよいとやってくれ」

「親分が書きやアいいでしょう」

「俺おきの字じゃ納まらない事があるんだ」

鼻紙を一枚、念入りに皺しわを拵しえて、ガラツ八の膝の下に置くと、禿筆ちひふでへたつぷり墨汁すみを含ませて、嫌がる手に持たせました。

「親分、勘弁して下さい。字を書く位なら、どんな使いでもしますよ」

「馬鹿、使い走りのきかないところだ、それも上手が書いちゃ役に立たねえ、思い切り下手な字でねえと——」

「下手な字が入用なんで、あつし、に書けと言うんですかい」

「早く言えばその通りだ、腹を立てるな八、江戸っ子は手習いの事や金の事で腹を立てちゃ見つともないよ」

「呆れたもんだ、書きますよ、何と書きゃ、いいんで」

「こうだ——十両はたしかに受取った、もう百両要るから、前の場所へ入れて置け、見張を付けると、子供の命はねえぞ——とそれだけでいい」

「驚いたね、親分、こんな手紙をどうするんで」

「拙ますい字だなア、よしよし、その拙いところがいいんだよ、——ところで、その手紙を、金座の石井の店へ投り込むんだ、序ついでにやってくれ」

錢形平次は手軽に言いますが、ガラツ八の方が驚きました。

「そんな事をしていいんですか、親分」

「いいてえことよ、誰も八五郎を誘拐かどわかしの曲者だと言う氣遣えはねえ」

「——」

ガラツ八は黙って立上がりました。

「まだ早いよ、陽の当ってるうちはいけねえ、暗くなったらやってくれ」

「へエ」

平次の言い付けは善悪共に黙って聴くガラツ八ですが、この脅迫きようはくじよう状の投込みには、さすがに驚いた様子です。

が、何うやらこうやら、それも無事に済みました。

翌る日の朝。

「錢形の親分さんはこつちで——」

石井平四郎の女房お君は、召使も連れず、たった一人で神田の平次を訪ねて来たのです。

「おや、御新造、こんなに早く、何か変わったことがありましたか」

平次はお静とガラッ八を眼で遠慮させて、お君を奥へ通しました。

「来ましたよ、親分」

「へエ」

「やはり親分の仰しやった通り、百両出せと言って手紙が来ましたよ、少し手跡てが違ちがうようでしたが相変らず鼻紙へ書いた拙ますい字で」

「そうでしょう、随分念入りに拙ますい字でしょう」

平次は場所柄にも似ず、莞爾にっこりとしました。ガラッ八の書いた字を、お君が拙

いと言ったので可笑しかったのです。

「それから主人と相談して、裏口の土台石の下へ百両入れました、——一日も早く子供を返して下さるように、この上延々のびのびになると、お春の二の舞が始まるかも知れない。乳母のお霜も、母の君も、生きている心持もしない——と手紙を添えました、悪かったでしょうか」

「構やしません、で、見張りは？」

「やはり付けませんでした」

「手引きか仲間が家の中にいるから、見張りを付けても何にもなりませんよ、金を遠方へ持出させずに、裏口の土台下へ置かせたのは、曲者の喰えないところ——」

平次はそんな事を言っております。始めは見張りを付けなかったのを惜しがりましたが、家の中の者が仲間すきで、一と晩中でも隙を狙われるとしたら、見張

りをつけるだけが無駄と判ったのです。

「その代り、小判には、目印めじるしがあります」

「――」

「改め役へ差上げて極印ごくいんを打つ前の、吹き立ての小判ばかり百両包みました。あれを一枚でも使えば足が付きます」

「それはうまい、――そんな都合のいい事があるとは知らないから、私は一枚一枚へ目印を付けるようにとお願いしました」

それも平次の指金さしがねだったのです。

「御免下さい、親分さんはおいででしようか」

入口にはもう一人の女客、その声を聞くと平次は、大急ぎでお君を隣りの一室へ押しやりました。

「親分さん、面目次第も御座いません」

入って来たのは乳母ぼあやのお霜でした。平次の顔を見ると、いきなり畳へ崩折くずおれて、赤ん坊のようにシクシク泣き始めたのです。

「どうした、お霜さん、お前さんは悪人じゃない、が、何だって、あんな大それた事をやったんだ」

「親分さん、御存じで」

「知らなくってどうするものか、——子供を隠して置いた場所が判らないんで、今まで苦勞していたんだよ——大根畑には、もうお前の元の亭主の文七はいないぜ」

平次は本当に何もかも知っている様子でした。お霜は、唯もう恐れ入って頭

も上りません。

「親分さん、とにかく、あれをお返し申します。別れた亭主の文七ですが、こんな悪事を重ねさせたくもありません。二度目の百両は確たしかに私に取りましたが、私から主人へお返しする顔もなく、ここまで持って参りました。どうぞ、私を縛むすって、このお金と一緒に、お役所へ突き出して下さいまし」

お霜は極印ごくいんのない小判百両を平次の前に押並べます。

「そんな事が出来るなら心配はしないよ。俺はただ、坊ちゃんが危ないから手が出せなかったんだ、どこに隠かくしている」

「練馬ねりまの文七の兄のところにおります」

「そうか、そいつは知らなかった。練馬の兄は何という名前だ」

「文左衛門という百姓で、私の元の亭主に似かたぎず堅気な男で御座います」

「八、飛んで行って、文七と石井の坊ちゃんを連れて来い。下手へたな事をして自や

棄^けを起させちやならねえよ」

「へエ——」

ガラッ八は真つ直ぐに飛んで行った様子です。

「ところで乳母さん、何だつてあんな罪の深いことをしたんだ。石井の旦那、御新造の歎きも容易^{ようい}じゃないが、そのためにお上にまで手数料をかけ、可哀想にお春は死んでしまったじゃないか」

平次の調子はしんみりしておりました。

「お春さんは可哀想なことをしました。あの時皆な申上げようと思いましたが、文七が欲に目がくれて、十両ほしいなんて言つて来たもんで、到頭言いそびれていると、今度は又大それた、百両と吹かけて来るじゃありませんか。私ほもういても立つてもいられなくなつて、ここへ飛んで参りました。欲得^{よくとく}づくでし
たんじゃ御座いません、皆な坊ちゃんのためを思つて——」

「誘拐かどわかして坊ちゃんのためとは可笑しいぜ」

「詳しく申上げなければわかりません。勇太郎様は亡くなった先の御新造の御子さんで、今のお君さんとは継ましい仲で御座います。お君さんはあの通りいい方ですが、自分の腹を痛めた子が二人も生れてみると、どうしても先妻の子の勇太郎さんによく当りません、——いえ、私の目から見ると、そう見えたので御座います」

「フーム」

「旦那様はお役所のお仕事が忙しくて、朝も晩もろくに子供衆の顔も見ないよ
うな有様。ことに総領そうりょうの勇太郎坊ちゃんは、育ちが遅れて可愛盛りを病身で暮
したために、旦那様も、つい面倒臭めんどくさいがって、存分に可愛がっては下さいません。
生れ落ちるからお育て申上げた私にして見れば、それが口惜くちよくしくて」

お霜は涙を拭いおります。愚直ぐちよくな中年女の、手の付けようもなく歪ゆがんだ愛情

を、平次は少し呆れて聴いております。

「で、どうしたのだ」

「去年から子さらいが流行って、諸方の親達がどんなに心配した事でしょう。私も品川に子供をさらわれた知己しりあいを持っておりますが、日頃ふだんはろくに見てもや
らなかつた子供でも、悪者にさらわれたとなると、まるで気狂いのようになっ
て、夫婦は夜の目も寝ずに捜し廻っております。勇太郎坊ちやまもたつた三
日でも姿を隠したら、旦那様や御新造様が目が覚めたように可愛がって下さる
だろうと——」

「——」
何という無茶苦茶な愛情でしょう。平次はこの愚鈍ぐどんに近い乳母が恐ろしくさ
えなりました。

「三年前、意気地がなくて別れた亭主の文七が、又一緒になりたがっているの

を頼んで、ほんの二三日坊ちやまを隠して貰うつもりだったので御座います。

文七はよく坊ちやまを存じておりますし、坊ちやまも文七ならなついていらつしやいます。二三日狙つて、涼み台からさらわせたまでは無事でしたが、あんまり詮議が^{まき}厳しく、連れて来ることも、白状することもならず、そのうちにお春さんが自害したり、文七が欲を出したりして、到頭こんな破目になつてしまいました。それもこれも重々私が悪かつたからで御座います。今にして思えば、旦那様のお可愛がりようにも不足はなく、ことに御新造様は、平常は一向お現^{ふだん}わしになりませんが、見上げた方で御座います」

隣室の二畳でシクシクと泣く声、お君は身につまされたのでしよう。

「私一人悪者にして、八方を円く納めて下さいまし。亭主の文七も別れてしまえば赤の他人ですが、私ともう一度一緒になりたさに片棒をかつぎ、貧の苦し

さに十両取る気になつたのでしよう、——百両と二度目の強請ゆすりをやるようではこの先放つて置いてはどんな事になるかわかりません」

「――」

こうなると、百両の細工を平次の仕業しわざと知らないお霜が不愆ふびんでもあります。

「どうぞ、私を縛つて、文七は許してやって下さいまし。私は御処刑おしおきになつても、少しも怨みがましい事は申しません。皆な私の馬鹿がした事で御座います」身も浮くばかりに泣き沈むお霜を、平次も持て余して眺めるばかりでした。

「霜や、霜や、お前は、お前は」

二畳から転げるようにお君。

「あ、御新造様、面目次第も御座いません」

×

×

ガラツ八が勇太郎をつれて帰つたのは、それから一刻ときも後のことでした。文

七は逃亡して行方が知れず。

間もなく、石井平四郎は金座役人を止して、子供三人の良い父になり、自殺したお春の家族には、存分な手当をしてやりました。

お霜は暇ひまを取って、どこから捜し出したか、文七と一緒に西国巡礼に出かけ、到頭これほどの大事件にも、平次は人を縛らずにおわつたのです。この事件ばかりは、ガラツ八も絵解きをして貰う世話がありませんが、平次は餌えきを獲とり損ねた鷹たかのような自尊心で、抜け荷の一味を縛つた大手柄を人に褒められるのをひどく嫌うっておりました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十年九月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第二卷 河出書房 昭和三十一年五月三十一日初版

編集・発行 銭形倶楽部

和蘭カルタ



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>